

玄洋社関係史料の紹介

石瀧 豊美

第 20 回

福岡表警聞懐旧談 (一一)

那珂川以東の福岡土族の集合場所は住吉神社。ところが、集まったのはごくわずか。大隊長の武部小四郎も遅れて来る有様。その内、越知彦四郎らの別働隊は福岡城を襲撃するものの敗走したことがわかります。武部は解散を命じ、単身身を隠しますが、ついに五月二日捕縛され、翌三日斬罪の判決が下り、その日の夜、死刑は執行されました。満年齢三十歳十一月での死でした。

五月七日、「筑紫新聞」が武部の最期もようを伝えていきます。刑場に臨んだ武部は、警吏にそれまでの丁寧な扱いにお礼を言います。警吏も福岡土族、おそらくは顔なじみだった人たちです。そして、斬り手に、私がよしと言うまで刀を振り下ろさないで欲しい、と頼みます。形を整えない死に様、相手が失敗しないように、との配慮です。やがて、武部は「よろしい」と声をかけました。その振る舞いは冷静で、

擡げ励色して謂らく。越知は已に城を衝けり。余は兵少なき為め其機を譲りたり。今日の事、只だ死あらんのみ。何の功をか、之希はんやと叫びて、自ら側にある酒樽の鏡をこちあげ、数碗を仰飲す。衆之れに効(倅カ)ひ対酌しつ、互に訣別の意を表し、神社の境内を去る。退くこと数十歩にして、同志加藤直吉、西方より馳せ来りて告げらる。彼の火焰は城中にあらざして、追廻近傍の角なりと云ふ。武部は沈吟しつゝ、越知が一果、城壘を抜くこと能はず、城内より退却、沿路所在の人家に放火して以て大休山へ引上げしならんと打嘆き、一列に向ひて、再挙策を謀る。その場の評論の結果たる、寧ろ此募兵を以て今より県庁を衝かんよりは、一時所在に潜伏して、以て後図を為すの優るに如かずとの点に帰着す。武部謂らく。然り然りと。乃ちその側にある、舌間慎吾を顧み、足下は兼て約せし如く、是より参集の同志を率ひ、間道を経して大休山に抵り、越知等に廻り逢ひて善後策を営まるべし。余は別に思案の存せし次第ありとて、武部は独りその場を去り、飄然として何処ともなく出去りにけり。蓋し猶々潜伏して再挙を謀るに意ありしなり。

明治丁丑

福岡表警聞懐旧談 上

清漣野生編述

第七回 (続き)

天既に白す(白む)。斯る折柄福岡城の方位に当り、炎焰天を焦す。武部、首を

擡げ励色して謂らく。越知は已に城を衝けり。余は兵少なき為め其機を譲りたり。今日の事、只だ死あらんのみ。何の功をか、之希はんやと叫びて、自ら側にある酒樽の鏡をこちあげ、数碗を仰飲す。衆之れに効(倅カ)ひ対酌しつ、互に訣別の意を表し、神社の境内を去る。退くこと数十歩にして、同志加藤直吉、西方より馳せ来りて告げらる。彼の火焰は城中にあらざして、追廻近傍の角なりと云ふ。武部は沈吟しつゝ、越知が一果、城壘を抜くこと能はず、城内より退却、沿路所在の人家に放火して以て大休山へ引上げしならんと打嘆き、一列に向ひて、再挙策を謀る。その場の評論の結果たる、寧ろ此募兵を以て今より県庁を衝かんよりは、一時所在に潜伏して、以て後図を為すの優るに如かずとの点に帰着す。武部謂らく。然り然りと。乃ちその側にある、舌間慎吾を顧み、足下は兼て約せし如く、是より参集の同志を率ひ、間道を経して大休山に抵り、越知等に廻り逢ひて善後策を営まるべし。余は別に思案の存せし次第ありとて、武部は独りその場を去り、飄然として何処ともなく出去りにけり。蓋し猶々潜伏して再挙を謀るに意ありしなり。



武部 小四郎

武部は平岡浩太郎・尾形到を伴ひ、井尻村に赴き、亦三宅村荻野篤は兼て同盟の士にもあり、同方に宿泊、専ら後図画策中、警吏の捜査甚しく、殊に三名同伴するは不利なるを以て、武部は平尾村故(野村)望東尼の家(現・平尾山荘)に潜行し、平岡・尾形は再会を約し、地行に帰り、同志糾合に傾注中、危機に迫り、小舟に棹し難を崇福寺中、心宗庵に避けたり。是より先、清原強之助も同寺に潜行し来り、海路薩軍に投せんと、諸方船便搜索中、恰好の船を志賀島に得、平岡・尾形に通告せしめ、使の行違より予告の時刻を經過するも来会せざるを以て、清原は単身出発せり。平岡・尾形ハ崇福寺中にて追捜を逃れ、忠僕弥四郎の案内にて宗像郡に走り、遂に陸路薩軍に投ずるの外なしと決し、平岡は鞍手郡許斐鷹助方に行き、尾形は武部の浜男に潜在しあるを誘ひ、許斐方に再会を約し、相別れたるも縛に就きたり。平岡は万難を冒して日向口の薩軍に投じたり。

亦清原は博多湾出發、日を経て肥前大島に廻航せしも、以西の諸港無事通過仕難きを以て、再び福岡に上陸、心宗庵住職八尋大潤の尽力に依り、遠賀郡芦屋港に出て馬関に渡り、同志の士長連豪(正確な読み不明・大久保利通暗殺者)を能登に訪ひしも相遭はず。後、遂に縛に就けり。因に記す。武部は之より山谿幽谷に晦輅し、変現(幻)出沒、昼は伏し、夜は顕れ、窃に壯士を嘯集して再挙を謀り、警吏と雖どもその所在を尋るに苦しむ。況んや、其他をや。或日、浜男の某旅店に來りて投宿す。所在の巡查怪んでその姓名を問ふ。武部は乃ち言ふ。私は何店の番頭であり郷里に今帰る所なりと答ふ。巡查曰く。決して然らず。何ぞ人相書の武部に似たるやと詰問す。武部謂ふ。その人相書の武部とは、此回福岡暴徒の巨魁武部小四郎なる可し。私は全くの田舎の産にて、数ヶ年博多に出で奉公なせる身分なりと、誣言す。

森林に投し、長谷なる幽邃(奥深くてももの静かなこと)に入りて数日を潜匿し、博多土居町馬医者田中某は曾て知音なりせば、其家の裏屋に潜伏して、大凡二十日斗りの事実を凌ぐ。遂に警吏に發覺せられ、数名の巡查は來りてその家を環して打囲み、臥室に闖入して之を縛せんとす。武部はその目を醒し、蹶起して捕手に向ひ、諸君等力を以て我を捕拿せんと欲するか。何ぞ、速かに來りて力を較せざると呼び、寄せ來る巡查四五名を投げ倒して格闘し、大笑して謂らんば、余が命窮矣、運尽矣。呵々。又何ぞ無用の勞を用んや。諸君、余を執んと欲せば、乃ち執へられよとて、自分及手を腰にして待つ。数名の巡查馳せ集り、靴にてその顔を蹴りなし、流血淋漓、恰も夜叉王の有様なりしが、遂に縛に就きて檻舎に繋がる。是五月二日の夜にして、即ち越知の一累が刑せられたる翌日のこととなりしなり。

翌三日、一日の中に於て獄成り(裁判が行われ)、死刑の宣告を受け、武部が断頭場に臨むや、顔色自若にして毫も動せざりけり。末期に臨み、警吏言はんと欲する所を問ふ。武部從容として答らく。今に於て將た何をか言はんや。唯願は

くは、諸君力を国家に竭されんことを。家に豚兒(じぶんの子)を謙遜して言つたもののあるあり。冀くは伝道せられよ(伝言を伝えてほしい)。その言は、身を殺して国に殉ひ、私を管んで義を忘る、勿れとの一語なり、と依頼し一言の私事に及ぶなし。身骨既に離る。然れ共、その体骸は屹として暫時く倒れざりけり。警吏某謂らく。余、武人の刑戮せられても、尚体軀の泰然たるは未だ嘗て見ざる所たり。是平素養ふ所、他に異なるあるに非ずんば、何を以て斯の如くならんや。嗟乎惜哉。斯くの偉丈夫を亡せりとて、為めに一点の暗涙を踐ざしと云ふ。その潜伏中の二絶と辞世の一首は世に膾炙せらる。左に之を掲げて武部の遺跡を一結す。

潜伏中作
長剣元期斬大蛇 如何雄
略属煙霞
友人又瀧賓王涙 暫对春
風見落花
初覺人間夢裡遊 無情山水却含愁
春宵露臥桜花下 憶起当年平薩洲
辞世
世の中よ満つれば欠くる
十六夜の
つきぬ名残は
露ほどもなし
(上巻終わり)